

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 402号室)
TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)
Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp
Web: http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp

2015年度 イギリス科運営委員
後藤春美(主任)、アルヴィ宮本
なほ子(副主任)、西川杉子、小川
浩之、中尾まさみ、大森雅子(教
務補佐)

主任挨拶

後藤 春美

昨年のニューズレター発行後のイギリス科の出来事としては、2014年10月18日(土)に盛大に行われたホーム・カミング・デーがまず挙げられるでしょう。参加して下さった大勢の卒業生の方々にお礼申し上げます。その場で同窓会を立ち上げるという話が出ましたが、将来的には、このようなイベントも同窓会を中心に企画できた方が良いのではないかと考えております。

その後、2015年3月には、無事6名の卒業生、また大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了生1名を送り出すことができました。卒業生のうち、2名は同専攻修士課程に、修士課程修了生は博士課程に進学しました。

今年度、イギリス科では、卒業生であり、助手も勤められました浜井祐三子先生(北海道大学)をSセメスター(夏学期)には大学院の客員准教授として、Aセメスター(冬学期)には教養学科の非常勤講師としてお迎えし、どちらも大学院と教養学科の二枚看板の集中講義で、教養学科の科目名としては「イギリス政治文化論」、「イギリス政治文化論演習」という二つの授業をご担当いただいております。先生のご専門とされる第二次世界大戦後のイギリスへの移民というテーマは学生の興味関心も高く、先生にはご多忙の中お越しいただき、一同大変喜んでおります。



ホームカミングデー 集合写真

教員の出版としては、イギリス科卒業生4人、すなわち木畑洋一先生(成城大学、東京大学名誉教授)、菅康子先生(津田塾大学)、原田真見先生(北海道大学)および私の共訳で、エリック・ホブズボーム著『破断の時代——20世紀の文化と社会』(慶應義塾大学出版会)を2015年3月に上梓することができました。歴史の大家で2012年10月に亡くなったホブズボームの講演、書評などをまとめた書物です。

また、続いて2015年4月には、西川杉子先生監訳で『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第7巻』も同じく慶應義塾大学出版会から刊行されました。11巻よりなる通史のうち17世紀を扱った巻で、装丁もとても美しい書物です。

先に、Sセメスター、Aセメスターと書きましたように、2015年度の東京大学は学事暦が変更され、Sセメスターは4月6日から7月

末、Aセメスターは9月14日から年末までとなり、1コマの授業時間も90分から105分に延長されました。駒場では誰も彼もが翻弄されているというのが正直なところですが、何とか、少しでも学問にふさわしいところに着地していけるよう祈りつつ、筆をおくこととします。



Professor Tony Claydon, Visiting Professor 2014

In April 2014, I spent a productive, and hugely enjoyable, month in Japan as the guest of the Department of Area Studies, in the Graduate School of Arts and Sciences at the University of Tokyo. In the weeks I spent on the Komaba campus, I had the privilege of the freedom to think, write and research – particularly to advance my current project, which looks at the ideas of time and history held by those English people who lived through the

revolution of 1689, and which they used to place the event within their conception of the overall pattern of the past. Being in Japan for a period that started with cherry blossom, and ended with the flowering of the azaleas, was an ideal moment and place to work productively. Meetings with Japanese scholars also helped. I presented two papers whilst I was in Japan: one at the University of Tokyo, the other at the Joint Seminar of Professors Satoshi Koyama and Shusaku Kanazawa in the Division of History of the Graduate School of Letters at Kyoto University. The reactions of the audiences were generous, stimulating and thought-provoking. In particular, they led me to deeper thought about one of my central arguments – that the people of the late seventeenth century were unlike those living in the West today, because they used examples from the distant past as immediately relevant guides to current behaviour, without recognising the passage of time, changing contexts, or the dangers of anachronism. Several comments pointed out how people in the twenty-first century still cite precedents in political and other arguments: I realised that I needed to think exactly how modern and early modern thought differed. I was also very glad to be allowed to teach a week-long intensive graduate course for the University of Tokyo on the Komaba campus. This took as its central theme the idea that the seventeenth century in England might have been the first ‘modern’ century. Talking to the bright and welcoming graduate students, and in particular exploring their sense of the ‘modern’ within the history of Japan, was also a help in my analysis of how attitudes might have been changing around 1689 in England. My time in Japan also allowed me to indulge a number of my hobbies. I like transport networks, and became reasonably adept at finding my way

on the Tokyo metro. I enjoy taking photographs, and had wonderful opportunities, especially in the shrines and temples of Tokyo, Kamakura, Nara, Kyoto and Asuka. I was able to visit Nikko again – which is one of my favourite places on earth. Perhaps most extraordinarily, I had the change to go to a baseball game at the Tokyo Dome. I love baseball: it was wonderful to see what was familiar, and what was different, about the Japanese game compared to the North American version. It was also fun to explain the rules to my excellent host for the entire stay, Professor Sugiko Nishikawa. We both thank Professor Shunsuke Katsuta for organising the evening!



京都御所にて



教務補佐挨拶 大森 雅子

2014年10月から、イギリス科の教務補佐員に就任いたしました大森雅子と申します。私は総合文化研究科の地域文化研究専攻ロシア科の出身で、イギリス科に所属したことはないのですが、この度ご縁をいただきまして、イギリス科の教務補佐を務めさせていただくことになりました。

私の専門は20世紀ロシア文学です。実は、イギリス科とは全く縁がなかったわけではなく、修士論文の審査では、中尾まami先生に大変お世話になりました。

博士課程に進学後の2006年にはロシア国立人文大学大学院でPh.Dを、2010年には東京大学で博士の学位を取得しました。私の研究テーマは、1920年代から30年代のソ連の作家ミハイル・ブルガーコフの作品論で、同時代の文化的、社会的コンテクストの中で彼の作品を読み解くという、地域文化研究ならではのアプローチでロシア文学研究を続けてきました。ブルガーコフはソヴィエト社会を風刺する作品を数多く書いたために、スターリン体制下では発表の機会に恵まれなかったのですが、ペレストロイカ以降再評価が進み、本国ロシアではドストエフスキーやトルストイを凌ぐほどの人気作家となっています。昨年、博士論文を元にした単著『時空間を打破する ミハイル・ブルガーコフ論』を出版しました。

地域文化研究で博士論文を執筆したおかげで、ロシア文学のみならず、ダンテやセルバンテス、モリエール、ゲーテ、はたまたアインシュタインに至るまで、数多くの偉人のテクストと

格闘しながら、比較文学的なアプローチでもブルガーコフを論じました。もちろん、イギリス文学も、ブルガーコフを論じる際には不可欠な側面でした。彼はSF作品を数多く書いていますが、それらの作品群にはH.G.ウェルズの『神々の糧』や『モロー博士の島』、『タイム・マシン』の影響が見られます。1920年代のソ連はSFブームに沸いていたので、ウェルズ作品のモチーフやテーマを積極的に取り入れた作家はブルガーコフだけではありませんでした。拙著では、ウェルズのダーウィニズム受容を比較しながら、ブルガーコフ作品を分析した章も設けました。

私自身はイギリスに一度も行ったことはないのですが、子供の頃にはピーターラビットの世界に憧れ、ロンドンに住む親戚から、朗読のカセットテープがついた絵本のシリーズを送ってもらったことがあります。それを聞きながら湖水地方に思いを馳せていた時期もあったのですが、その後、運命の悪戯でロシア熱に取り憑かれてから20年近く経ってしまいました。この度、ご縁があってイギリス科のお手伝いをさせていただいていますので、今後はロシアだけではなく、イギリスとロシアの文化的な接点についても研究していけたら面白そうだなと、コモンルームのジャンル豊かな蔵書に囲まれながら、漠然と考えているところです。

これまで、他の地域出身者がイギリス科の教務補佐員を務めたことはなかったのでしょうか。教務補佐員として勤務して半年が過ぎましたが、すでに力不足は感じていて、他の地域の教務補佐員からも、専門とは違う研究コースで本当に仕事がこなせ

るものなのか、と心配されたことがありました。それでも、イギリス科の先生方と学生の皆さんにサポートしていただきながら、楽しく仕事に取り組んでいます。それどころか、イギリス科のアットホームな雰囲気の中にと、自分がよそ者であったことを忘れてしまうほど居心地の良さを感じています。このような素敵な職場に温かく迎え入れてくださったことを常に感謝しつつ、教務補佐員の任を全うしたいと考えております。

イギリス科の歴代の有能な教務補佐員の方々と比べると、甚だ頼りない私ではありますが、イギリス科の運営と学生の学習環境の整備に、私なりに尽力していく所存です。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



レスタシャーより

伊藤 航多

私は大学院時代にイギリス科で学び、2008年度には地域文化研究専攻の助教として主にイギリス科研究室にて勤務させていただきました。2009年からは津田塾大学の英文学科に勤めています。昨今はグローバル化・少子化などの影響でどこの大学も試練を迎えています。そういう大変な時期にも関わらず幸いなことに勤務先から1年間の研究休暇をいただき、今年の4月からイギリス中部のレスタシャーに滞在しています。

イギリスでは、近年のイギリス都市史研究の第一人者であるローズマリー・スウィート教授のお世話になり、かつての留学先であるレスター大学に再び受け入れていただきました。私は主に近代イギリスにおける郷土誌と政治文化の関係について関心があり、ここを拠点にして研究をしています。

私は以前留学していた際には、

大学キャンパスに近い郊外住宅地に住んでいたのですが、今回は気分を変えて市街地から北へ15キロほど離れた、田園地帯に囲まれたサイルビーという村に家を借りることにしました。自宅から大学キャンパスまでは主に車を運転して田舎道を通り抜けながら通っています。

車の運転という点、日本から来た場合には、イギリスの道路が左側通行なのは馴染みやすく良いのですが、ラウンドアバウト（環状交差点）には誰もが最初は戸惑うのではないのでしょうか。

ラウンドアバウトの構造について知らない人に文章だけで説明するのは難しいのですが、特徴の一つは原則的に信号機による通行指示がなく、交差点に入って出るまでの判断がドライバー自身に委ねられるという点です。

参考までに英国政府のホームページに掲載されているラウンドアバウトの通行規則を見てみると、「他の車や車道など情報全てを把握して進入に備えよ」「他の車がウィンカーを使って適切に進行方向を示すとは限らないので注意せよ」「どこに進むのかはっきりしない車もいるので配慮して距離を取れ」などと、あくまで淡々と、しかし初心者の不安を煽るような文句が躍っています。実際、ラウンドアバウトでは単なる操縦だけでなく、自己主張や周囲への気配りといったある種の社会的なスキルも必要で、最初は処理しなければいけない情報量の多さに少し慌ててしまいます。

しかし、ちょっと慣れてきて観察する余裕が出てくると、このラウンドアバウトの仕組みもなかなか奥深く感じられるようになりました。信号機がドライバーに「行ケ/止マレ」を一方的に指図して交通の流れを作るのに対して、ラウンドアバウト

ではドライバーたちが相互に注意しあい、ある意味コミュニケーションを取りながら自律的に交通の循環を作り出していくわけです。それは単なる実用性だけでなく、ある種の社会のありようを象徴しているようでもあり、そんなことを考えていると、多くの車が淀みなくラウンドアバウトを出入りしていきさまは端で見ていても飽きないものがあります。

フランス人画家ドレが1870年頃のロンドンの雑踏を活写した版画のなかでは、車道と歩道の違いどころか左右の通行レーンの区別もなく、ただ無茶苦茶に押し合いへし合いして行き交う人々や馬車の群れが描かれています。それから40年ほど経ち、1909年にイギリス最初のラウンドアバウトが田園都市として有名なレッチワースに敷かれたそうです。この間に社会工学のテクノロジーの進歩だけでなく、ドレが描いたあの無秩序極まりない群衆はどのようにして交通スキルを体得したのでしょうか。好奇心をかき立てられます。

しかし、近年では主要なラウンドアバウトでは信号機を付けるのが当たり前になり、気のせ

いか私が留学していた10年前と比較べても信号機が増えているように感じます。将来的に自動運転の車が普及したら、情報処理に手間のかかりそうなラウンドアバウトは完全に消滅してしまうのかもしれませんが。それはそれで社会が獲得した一つのスキルを失うようで寂しい話だな、と帰宅する車中つらつらと考えました。



上島先生を追悼する 山本史郎

上島建吉先生が7月2日に逝されました。83歳でした。転倒事故のために入院され爾来4年あまり、いくたびかお見舞いする機会を得、時にかいま見るかつての先生の温顔に一喜一憂しつつも、坂道をゆっくりと下っていくかのようなご病床を見るにつけ、いつしかこの日の来たらんことを覚悟してはいましたが、あの事故さえなければと早すぎるご逝去に悔しい思いでいっぱいです。先生は1931年に生ま

れ、54年に教養学科イギリス科の2期生として卒業されました。文字通りの大先輩ですが、私からはじめてお目にかかったのは駒場の教室でした。「徒然草」を英訳する授業で、毎週金釘流の英語をていねいに添削してくださいました。その後引き続き教養学科でも開講されたのを受講したところ、初回の課題のコメントに「あいからず言葉数が多いね」と書かれ、自分のことを覚えていてくださったことに大感激でした。上島先生は頭脳明晰はいうまでもありませんが、一言でいって大人(たいじん)の風格がありました。諸事万端ゆとりある精神で人生に臨まれ、専門の英詩や英語のご研究はいうに及ばず、将棋・コントラクトブリッジ等の勝負事、テニス等のスポーツ、車の運転など諸々の事に興味をもたれ、常に穎脱の域に達することのできる方でした。先生ご自身早すぎる死は無念でしょうが、警咳に接して薫陶をうけ、ふくよかなお人柄に包んでいただいた幸福を思い出す者たちこそ断腸の思いです。ただご冥福をお祈りするばかりです。

卒業生の方へ お礼とお祝い

昨年ニューズレターにて同窓生の皆様にご支援をお願いしました後、多くの方から御芳志を賜りました。紙幅の関係上、お名前を記すことができませんが、深く御礼申し上げます。

「イギリス科ニューズレター」は現在、紙媒体と電子媒体の2種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記卒業生専用アドレス [igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp) まで、送付先アドレスのご連絡をお願いします。

また、送付先アドレスのご連絡をお願いします。

また、お届けいただいているご連絡先(住所・電話番号・メールアドレス等)に変更などがおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

ニューズレターに関しましては、経費削減と環境への配慮から電子化を進めておりますが、同窓会のご案内など郵送が必要なものもございます。郵送費の資金繰りは毎年厳しくなっており、同窓生の皆様引き続きご支援をご検討いただけますと幸いです。

ご賛助いただけます場合は、右記口座までお振込みいただけますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行
名義：イギリスカ
口座番号：10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。
銀行名：ゆうちょ銀行
支店名：〇〇八店(ゼロゼロハチ)
口座種別：普通
口座番号：4362167